# 薬になる山野草「ドクダミ」

平田 敏文

梅雨の季節に，庭の隅のじめじめした日陰で白い花を咲かせる「ドクダミ」(Houttuynia cordata Thunb.)は，古くから化膿や創傷を治療する民間薬として使用されている野草である。和名は「毒痛み」や「毒矯」からきていると言われ，漢方でも「重薬」,「十薬」,「魚腥草」などと言われて，抗菌作用，抗ウイルス作用，利尿作用，鎮痛，止血，組織再生促進などの効用が報告されている。葉を傷つけると独特の異臭がするので毒草のように思っている人もいるが，人に対する毒性はなく，むしろ，異臭の原因となっているデカノイル-アセトアルデヒドなどのアルデヒド類には抗菌活性があるとされている。

山野草の愛好という観点からすると，群生したドクダミ（写真左）の濃緑のハート形の葉の間から覗く真っ白な十字形の花は，シンプルな造形であるが梅雨の鬱陶しさのなかで映えて美しい。白い花弁と見えるのは，葉が変形した苞（総苞葉）であり，本当の

花は花弁のない小さな花が沢山集まって穂状になっている部分である。ドクダミは，繁殖力が非常に旺盛で，種だけでなく地下茎をのばして殖えていき，蔓延りすぎて困ることもある。このため，山野草の愛好家は，葉に斑が入ったものや八重咲きの変異種（写真右）を，小さな鉢に植えて楽しんでいる。

（広島大学マスターズ通信第 17 号より）